

『トルコ皇帝セリムの悲劇』におけるトルコ人表象

—東地中海をめぐる新たな国際情勢を前にして—

Representations of the Turk in *The Tragedy of Selimus, Emperor of the Turk*
—In the Face of an Emerging International Situation—

石橋敬太郎*

Keitaro ISHIBASHI

Robert Greene's *The Tragedy of Selimus, Emperor of the Turk* was written in 1591. Based upon historical events that took place between 1511 and 1513, the play depicts the exploits of the Ottoman prince, Selimus, who mercilessly sacrifices his family and trusted advisors in order to gain absolute power to govern. To gain absolute power, Selimus forges an alliance with neighboring countries and exercises power according to Machiavelli's political ideas. Greene's portrayal of Selimus is different from that of his contemporaries in England. Early modern chroniclers such as John Foxe exhibit the sultan's brutality and barbarity. Greene's representation of Turks as merciless, evil, and Machiavellian might have destabilized England's confidence in Turkey. Unlike the prospects of the Elizabethan government, the playwright did not show Turkey to be a reliable partner for England. Actually, reacting to the news of treacherous Turkish conquests in Europe and the Mediterranean, the Earl of Essex and his supporters planned to form an alliance with Persia. This paper illuminates the ambiguities and contradictions of England's political and military relationship with Turkey by examining representations of Turks in Greene's play as it related to the emerging international situation in the area surrounding the eastern Mediterranean.

Keywords: Islam, Turkey, Spain, Foreign Policy
イスラム、トルコ、スペイン、外交政策

序

ロバート・グリーン(Robert Greene)の『トルコ皇帝セリムの悲劇』(*The Tragedy of Selimus, Emperor of the Turks*)が執筆された時期は、1591年頃(出版は1594年)とされている(Wiggins III: 129)。ジェイン・グローガン(Jane Grogan)によると、本劇はイスラム世界を扱って人気を博したクリストファー・マーロウ(Christopher Marlowe)の『タンバレイン大王』(*Tamburlaine the Great*)第一部、第二部の人気に乗じて執筆された(135)。上演された劇団はエリザベス女王一座である。本劇の主な資料として、ピーター・アシュトン(Peter Ashton)によるパオロ・ジョヴィオ(Paolo Giovio)の『トルコ史』(*The Turk's Chronicle*) (1531)の英語訳『トルコ史に関する短い論説』(*A Short Treatise upon the Turks' Chronicle*) (1546)が挙げられている(Wiggins III: 131)。

本劇のあらすじを簡単に紹介しよう。劇中では1511年から13年にわたるトルコとペルシャとの争いを背景として、セリム(Selimus)がイエニチェリに擁立されて二人の兄コルクト(Corcut)とアコマット(Acomat) (歴史上のアフメト(Ahmed))を排除し、父バヤズイト二世(Bajazet II)を退位させて、皇帝に就くまでの歴史が再現されている。その過程で、セリムは、父や兄弟のみならず、妹ソリマ(Solyma)と彼女の夫ムスタファ(Mustaffa)、そしてアコマットの妻と息子たちを次々と殺害す

る。全体として、宗教や法をものともせず、近代的な相貌を帯びたセリムの野望が描かれている。

歴史上の出来事と劇中のそれとの相違については、どうであろうか。劇中とは異なり、歴史ではトルコはペルシャとの戦いに敗れてはいない(Hale 36-37)。また、歴史上のセリムの二人の兄がペルシャに同調したシャークル(Şahkulu) (サファヴィー朝の奴隷の意)の反乱鎮圧に苦戦していたことを機に、セリムが皇帝位を狙った事実についても、劇中では言及されていない(Dale 87)。さらに、バヤズイト二世はセリムによって毒殺されていないという説もある(Vitkus 18-19)。この歴史の書き換えが何を意味するのかについては、後述する。

ところで、本劇に関する批評史を紐解いてみると、批評家の主な関心は、バヤズイト二世の三人の息子たちの宗教観や支配原理に向けられてきた。たとえば、マシウ・ディモック(Matthew Dimmock)は、劇中のトルコ人のなかに野蛮さと暴力のほか、多様な宗教観に基づく支配原理を見出す(173-74)。彼によると、セリムは、宗教を支配のための道具とみなし、マホメット法すら懐疑的に見ている。また、アコマットは、神聖な預言者マホメットの奇跡を利用して自身の武力による皇位篡奪を正当化する。長子コルクトは、イスラム教からキリスト教に改宗し、セリムの野望を阻止しようとする。このようなことから、リンダ・マクジャネット(Linda McJanet)は、神の代理人たるエ

リザベス女王(Queen Elizabeth)を中心とした支配を支持する当時の保守的な観客にとって、バヤズィトの息子たちの宗教観や支配原理は、スキャンダラスなまでに不敬なものとして映ったであろうと述べている(83-84)。

確かに、ディモックたちが論じたように、セリムやアコマットの宗教観や支配原理は、ジョン・フォックス(John Foxe)が『殉教者の書』(*The Acts and Monuments of the Church Containing the History and Sufferings of the Martyrs*)(1563)の「トルコ史」で示した野蛮で残虐だとするトルコ人表象(I: 370-93)をこえている。フォックスのトルコ人表象の背景には、イスラム教徒を反キリストとして位置づけようとする国教会の戦略があり、彼のトルコ人表象は、当時のイングランド人に広く知られていた(Maclean and Matar 26-27)。しかし、グリーンンの『トルコ皇帝セリムの悲劇』には、フォックスが表象するトルコ人をこえて、権力を獲得し、支配を確実にするためには、宗教や法を道具とする君主像が描出されている。

それでは、宗教や法を支配のための道具として皇位を狙うセリムたちが、1591年頃にロンドンの舞台に登場した背景には何があったのであろうか。この問いに対して、ディモックたちは十分な回答を与えていない。すなわち、セリムたちがバヤズィトの皇位をめぐる争った過去の歴史を現在に再現する意味、言い換えるのなら、劇作家の歴史意識には触れていないのである。これを明らかにしようとするのが拙論の目的である。その手掛かりとして、1591年頃の東地中海をめぐる国際情勢について確認してみたい。

本劇が執筆された時期、世界支配をもくろむトルコの勢力拡大を阻止するために、モロッコがスペインと同盟を模索し、また神聖ローマ帝国やネーデルラントなどヨーロッパ諸国がペルシャとの同盟を築き始めるといった新たな世界秩序が現れつつあった(Grogan 154)。この新たな世界秩序の出現は、1588年のアルマダ撃滅以後も断続的に続くスペインによるイングランド侵攻を打ち砕くためモロッコやトルコとの軍事的な同盟を求め続けていたエリザベス政府を悩ますことになった。エリザベス女王は、1550年代から行われてきたモロッコやトルコとの商業的な結びつきを政治的に利用して、スペインを打ち倒そうとしていたのである。

なかでも、イングランドとトルコとの政治的な結びつきについては、次のような経緯があった。すなわち、1580年に二人のロンドン商人サー・エドワード・オスボーン(Sir Edward Osborne)とリチャード・ステイパー(Richard Staper)が皇帝ムラト三世(Murad III)からトルコ帝国の全領域におけるイングランドの貿易に対して十分な権利と特権を獲得し、翌1581年にイングランド女王エリザベスがレヴァント会社に特許状を認めて以来、両国の交易は盛んになり(Black 241-42)、その関係も対スペイン戦略に傾斜し始めた。この時期、トルコの脅威に対するイングランド政府の姿勢は、決して否定的なものではなかった。トルコの勢力拡大がスペインなどのカトリック諸国を犠牲にしている限り、イングランド政府は、トルコ人をローマ教皇の高慢さを

罰するために神から送られてきた懲罰とみなしていたのである(Vitkus 8)。

そのような時期に、宗教や法などをものともせず、人目を惹くターバンを巻き、三日月刀を手にして虐殺を繰り返すトルコ人の登場のほか、本劇の舞台となった東地中海におけるロンドン商人の貿易拠点ビザンティウム(Byzantium)、イコニウム(Iconium)やスミルナ(Smyrna)は、観客にトルコをより現実的に認識させるのに十分であった(Maclean and Matar 49)。そのことは、劇中で描出されているトルコ領域の地理がマールウの『タンバレイン大王』のそれよりも明確であることから理解できるであろう。

その一方で、地中海を舞台としたトルコ・スペイン東西両大国の世界支配をめぐる複雑な国際情勢は、イングランド商人たちの目を東方のサファヴィー朝ペルシャやムガル朝インドに向けさせ始めていた(Maclean and Matar 14)。ペルシャからは生糸、生綿や干し葡萄、インドからは香辛料、真珠や宝石がイングランドにもたらされ、エリザベス政府の財政基盤を支えつつあった。1598年には、冒険家のサー・アンソニー・シャーレイ(Sir Anthony Sherley)が、エセックス伯爵ロバート・デヴルー(Second Earl of Essex, Robert Devereux)の求めに応じてペルシャにわたり、同国の皇帝シャー・アッバース一世(Shah 'Abbas I)にキリスト教国との同盟を申し出るにいたる。このとき、エセックス伯爵は、トルコ勢力を抑えるためにペルシャとの同盟を考え始めていたと言われている(Grogan 152)。このことについて、リチャード・ウィルソン(Richard Wilson)は、エリザベス政府の親トルコ外交政策を破綻させる目的があったと分析している(209-26)。劇作家とエセックス伯爵との関係はわからないものの、時代は、トルコを信頼できるパートナーとして認識するエリザベス政府の親トルコ政策とは異なる方向に向かいつつあったのである。そこで、以下においては、グリーンンの『トルコ皇帝セリムの悲劇』を執筆された時期のエリザベス政府がもくろむ親トルコ外交政策に位置づけて、劇作家のトルコ人表象を通して、その政策の曖昧さや矛盾を見出し、ディモックやマクジャネットの見解を一步前進させてみたい。

I

開幕早々、トルコ皇帝バヤズィト二世は、史実を離れて、敵対するサファヴィー朝ペルシャ皇帝イスマール(Ismael)に干渉され続けており、レヴァントを奪われたことを観客に告げて、劇中世界を執筆当時の中東情勢のなかに位置づける。すなわち、史実では、ペルシャとトルコとの戦いは、バヤズィトの跡を継いだセリム一世の治世になってからのことである(Winter 131)。バヤズィトの治世では、ペルシャのイスマール一世(Ismael I)がトルコ進出をもくろんで宣教師を通してトルコ人の勧誘を行っていたにすぎない。バヤズィトも高官たちも、彼らの動向を静観するだけであった(Dale 86)。事態が急変するのは、1511年にシャークルを名乗る者が反乱を起こしたときのこ

とである。他方、劇中のバズィットは、この出来事には言及せず、トルコとペルシャが交戦状態であることに言及し続ける。

この歴史の書き換えは、本劇が執筆された時期のトルコとペルシャとの争いのなかに位置づけるのに十分であったと思われる。すなわち、両国は、1590年に一世紀以上にわたる交戦を休止したとは言え、依然として軍事的に緊迫した状況にあった。ペルシャの皇帝アッパース一世は、クズルバシュ(Qizilbash) (スンニー派トルコ人がサファヴィー朝の創設者イスマーイーラー一世を支援したシーア派トルクメンの七部族に与えた呼称) の党派争いによる内乱状態を回復し、再びトルコに対抗する目的で、同国に倣った常備騎兵軍を組織するとともに、これまでの部族の長による政治体制を改め、君主の絶対的な権力のもとで統制を担う専制国家へと転身をはかっていた(Dale 91-94)¹。その間、トルコも着々とペルシャとの戦いに備えていた。事実、1603年には、両国の間で激しい戦闘が繰り広げられることになる。

それでは、当時の中東情勢を想起させる文脈のなかで、劇作家は、トルコ人をどのように表象したのであろうか。バズィットは、トルコ人を表すステレオタイプな特徴である「野心」や「殺人」などによって帝国の支配権を手に入れようとする息子セリムを次のように紹介する。

For Selimus' hands do itch to have the crown,
And he will have it—or else pull me down.
Is he a prince? Ah no, he is a sea,
Into which run nought but ambitious reaches,
Seditious complots, murder, fraud, and hate.

(Scene 1. 177-81)²

バズィットの言葉は、フランシス・ベーコン(Francis Bacon)が当時のイングランド人に次のようにトルコを紹介した言葉を思い出させてくれる。すなわち、ベーコンは、「残忍な暴君たちは、帝位継承のたびに皇帝の血に手を浸してきた・・・愛情を抱くこともなく、聖書が記しているように、女性の願いを聞き入れず、敬虔な信仰心や子どもに対する情すらない。道徳もない国なのである」(VII 22)と述べていた。

しかし、劇作家が表象するトルコ人は、ベーコンのそれにとどまらない。劇作家は、セリムを支配のためには宗教や法を恐れず、奸計をめぐらす暴君として登場させて、エリザベス政府の親トルコ外交政策の矛盾や曖昧さを観客に突きつける。すなわち、セリムにとって、宗教や法は平和を維持するための道具

にすぎない。彼にすれば、父、母や兄弟という名も社会を平穩に保つための政策なのである(Scene 2. 88-115)。そして彼は、部下のシナン・バサ(Sinam Bassa)に「皇帝の絶対的な支配権とはな、シナンよ、国王になるためには悪魔になれるほど甘美なものじゃ」(“An empire, Sinam, is so sweet a thing, / As I could be a devil to be a king”) (Scene 2. 203-204) と言う。目的のためには父親殺しも正当化するセリムの支配欲は、マキアヴェリ的である。すなわち、ニコロ・マキアヴェリ(Niccolò Machiavelli)は、彼の『君主論』(The Prince)(1532)のなかで「とりわけ、新しい国王は、政体を保持するために信義、友情、人間性や宗教に背いて行動することを強いらられるので、人間が評価するものをすべて守るわけにはいかない」と述べていた(81)。

このように、マキアヴェリ的なトルコ人を舞台に登場させ、劇中の出来事の本劇が執筆された時期の文脈に位置づけて、トルコの歴史を再現する劇作家の手法は、バズィット二世がタタール人を率いたセリムとの会見を拒否した後の場面にも見出せる。すなわち、バズィットは、ハンガリーのベルグラード(Belgrade)に隣接するサマンドリア(Samandria)をセリムに与えて、彼による皇位篡奪の危機を回避しようとする。サマンドリアは、かつて皇帝マホメット(Mahomet)が追い払われた地域であり、ポーランド人やハンガリー人から攻撃を受け続けている危険な地域であった。このバズィットの仕打ちに対して、セリムは次のように述べる。

No doubt thy father loves thee, Selimus,
To make thee regent of so great a land;
Which is not yet his own, or if it were,
What dangers wait on him that should it steer!
Here the Polonian he comes hurtling in
Under the conduct of some foreign prince,
To fight in honor of his crucifix!

(Scene 4. 7-13)

このセリムの言葉のなかで注目したいのは、ポーランド人のトルコに対する抵抗である。この出来事は、1589年にトルコ皇帝ムラト三世がポーランドと戦った事実を思い出させてくれる(Hakluyt 6: 72)³。劇中のセリムがタタール人と同盟を組んでいるという設定も、劇中の出来事の本劇が執筆された時期の文脈に位置づけるのに役立つ。すなわち、セリムが頼みとするタタール人は、1590年前後、クリミア半島、ヴォルガ川流域や

¹ ペルシャがトルコと和平を結んだ背景には、ペルシャの内紛があった。すなわち、1576年にサファヴィー朝第2代皇帝タフマースプー一世(Tahmasb I)が世継すると、後継者争いが生じた。この後継者争いのさなか、タフマースプー一世に抑えられていたクズルバシュが内乱を起こすなど、ペルシャは無政府状態に陥った。1587年、王子アッパースは、兵を挙げ、父から王位を譲り受ける。翌1588年に、アッパース一世は、クズルバシュを抑えて実権を掌握し、1590年にトルコと和平を結んだ。

² 以下、グリーンからの引用ならびに行数表示は、Daniel Vitkus ed., *Selimus in Three Turk Plays from Early Modern England* (Columbia UP, 2000)に拠る。

³ なお、1590年のエリザベス女王宛、トルコ皇帝ムラト三世の首席顧問官シナン・バサ(Sinam Bassa)の書簡によると、ムラト三世は、エリザベス女王の求めに応じてポーランドと和平を締結した(Hakluyt 6: 71-73)。

シベリアなど広範囲に広がっており、カスピ海ルートによってペルシャと交易を行っていたイングランド商人にとって(Black 239)、彼らは決して遠い過去の人物ではなかったはずである。そうしてみると、劇作家は、本劇を当時の東地中海を取り巻く緊迫した国際情勢に位置づけて、新たなトルコ人を表象しつつ、トルコの歴史を再現していたと考えられる。

II

続いて、セリムのバヤズィト二世に対する反乱が鎮圧されたことに乗じて、アコマットがトルコ皇帝の座に就く決意をした場面が描かれる。この場面においては、本劇が執筆された時期のトルコの支配体制の一端を垣間見せてくれるほか、アコマットのコーランに対する姿勢も示される。すなわち、アコマットは、セリムが帝国の常備歩兵軍団で、火器で武装した最精鋭軍団イエニチェリに支持されており、帝位に目を向ければ彼らに武装蜂起されることを知っている。歴史上、この武装軍団が16世紀までのトルコ帝国拡大に貢献したのは言うまでもない。そして、劇中のトルコの宮廷人カリ・バサ(Cali Bassa)がバヤズィトの義理の息子ムスタファにセリムこそ皇帝にふさわしいと進言したように、劇作家が描くトルコも強大なイエニチェリを基盤とした武力を正義とする軍国主義体制の帝国として示される。

劇中のイエニチェリはまた、イングランドを脅かし続けるスペインに対抗できる有効な軍事的な勢力というエリザベス政府の認識を観客に思い出させたであろう。事実、エリザベス女王は、トルコ皇帝ムラト三世に書簡を送り続け、1590年もしくは翌年の1月に同国の海軍大臣とイエニチェリの司令官からスペイン攻撃の約束を手に入れた(Thomas and Tydeman 310)。トルコにしても、スペインを打ち倒すうえで、このカトリック国を敵とするイングランドと手を結ぶことは有益であった。ただし、劇中のイエニチェリが皇位篡奪の原動力として示されていることも、エリザベス政府の親トルコ外交政策の政治的な意義を考える際に思い出されてよいであろう。

それでは、預言者マホメットやトルコ人が聖典とするコーランについて、劇中のアコマットはどのように認識しているのだろうか。アコマットは、武力でトルコの皇帝位を手に入れるにあたり、「神聖な預言者マホメット、トルコ人にとって最高の権威者で保護者」(“the holy Prophet Mahomet, / Chief president and patron of the Turks”) (Scene 10. 16-17) の奇跡を信じている。預言者マホメットの奇跡が武力によって到達されるというトルコ人の認識は、すでに16世紀のヨーロッパ人にとってなじみのあるものであった(Dimmock 174)。このような文脈のなかで、アコマットは、次のように述べて、継承権のある甥ムハマド(Muhammad)が住むイコニウムでの大量虐殺を預言者マホメットやコーランにかけて正当化する。

That thou and all the city yield themselves;

Or by the holy rites of Mahomet,
His wondrous tomb and sacred Alcoran,
You shall die: and not a common death,
But even as monstrous as I can devise.

(Scene 12. 18-22)

この引用からわかるように、預言者マホメットもコーランも、アコマットにとって信仰の対象ではない。当時のイングランド人がコーランをどう認識していたかについては、再びフォックスの言葉が参考になる。すなわち、フォックスは、「コーランと呼ばれているマホメットの法には、あまたの虚栄、虚言や神に対する冒瀆が含まれており、人々の前で読まれるものではなく、あざ笑われるに値するもの」と断じ、「マホメットの法に従わない者は、(コーランの言葉にあるように)死に処せられるか、税を納めさせられることになる」と述べていた(I: 371)。

しかし、フォックスの言葉以上に、劇中のアコマットは、コーランを権力獲得のための道具と認識している。すなわち、アコマットは、皇位獲得の障害となる甥ムハマドと姪ゾナーラ(Zonara)を部下に絞殺させることを厭わない。しかも、事態を重く見たバヤズィト二世がアコマットに武器をおくように説得するために従者アガ(Aga)を使者として送ったとき、アコマットは、アガの目をえぐり取り、両手も切断する。コーランをたてに虐殺や残虐な行為を正当化するアコマットを見て、どれだけの観客がトルコを信頼できるパートナーとして認識できたであろうか。トルコ人に対する恐怖は、時期は少し後のことになるが、1597年に印刷された作者不詳の小冊子『トルコ帝国の政策』(*The Policy of the Turkish Empire*)においても反復される。すなわち、「オットマン人のあり余る偉大さ・・・彼らの名が与える恐怖は、彼らの勝利に満ちた力に対する恐怖によって、今やヨーロッパの国王や王侯を震え上がらせている」(qtd. in Chew 133)と。この小冊子に記述されているようなトルコ人を表象することによって、劇作家は、エリザベス政府の親トルコ外交政策の曖昧さや矛盾を突きつけ続けていると言えるのではないか。

III

劇中では、アコマットの残虐性を恐れるバヤズィト二世がセリムの反逆を許し、彼をイエニチェリの司令官に任命して、帝国の秩序回復を急ぐ場面が描かれる。この場面においても、軍事力を背景としたトルコの政治体制が色濃く描き出される。すなわち、イエニチェリは、バヤズィトの命令とは裏腹に、セリムをトルコの皇帝に就ける。この急激な皇帝の交代を疑うバヤズィトに対して、シナン・バサは、ペルシャ王との戦いの司令官として彼を皇帝に選んだと説明する。そして、観客は、皇帝となつたばかりのセリムが、ユダヤ人アブラハム(Abraham)を雇ってバヤズィトの死を計略するほか、妹ソリマと彼女の夫ムスタファアやアコマットの二人の息子を亡き者にしようとする計略を目の当たりにする。この計略に関して、ダニエル・ヴィトカス

(Daniel Vitkus)は、初期近代のフィクションや演劇作品のなかで、トルコ人が悪魔と結びつけられ、残虐な暴君として描かれていることから、「この種のオリエンタルな独裁政治の典型的な例」と言う(11)。確かにそうなのだが、前の場面においてセリムが奸計をめぐるマキアヴェリ的な皇帝として、帝国を支配しようとしていたことも忘れてはならないであろう。

セリムの兄コルクトの改宗についてはどうであろうか。哲学などの学問に造詣は深い、支配者としての資質に欠けるコルクトは、セリムによる暗殺を恐れ、変装してロードス島へ向かって逃亡する。その逃亡の途中で出会ったイングランド人キリスト教徒プリランブル(Bullithrumb)の言葉に、コルクトは心を動かされる。そして、小姓に裏切られて、セリムの前に連行されたとき、コルクトは、次のように述べて、セリムに自身の言葉に耳を貸すように忠告する。

Then, Selim, hear thy brother's dying words
And mark them well, for ere thou die thyself,
Thou shalt perceive all things will come to pass
That Corcut doth divine before his death.
Since my vain flight from fair Magnesia,
Selim, I have conversed with Christians. . . .
(Scene 22. 45-50)

この引用の最後で、コルクトは、キリスト教徒に改宗したことをセリムに伝えているが、歴史上のコルクトがキリスト教に改宗したという記録はない。それにもかかわらず、わざわざ劇作家がイングランド人キリスト教徒を登場させて、コルクトを改宗させたのは、トルコとの同盟を構築するうえで、トルコ人に改宗を求めるヒュー・プロウトン(Hugh Broughton)などイングランドのプロテスタント神学者たちの目的が劇作家の意識にあったのかもしれない(Dimmock 176)。

これらのプロテスタント神学者たちが望んでいたように、劇中のコルクトは、イングランド人キリスト教徒との会話の結果、彼から「私の魂を救い、もっとも気高い神の怒りを静めてくれる方法」(“the way to save my soul / And 'pease the anger of the highest God”) (Scene 22. 51-52)を学び、キリスト教の神の全能性を称賛する。続けて、コルクトは、セリムに父を毒殺した場所であるチュールル(Chiurlu)で死を迎えると予言し、「暗い地獄」(“dark hell”) (Scene 22. 78)で魂が苛まれる前に、その貪欲な精神を変えるように迫り、キリスト教の神に救済された彼の魂を受け取るよう弟に懇願する。

しかしながら、セリムはキリスト教に改宗したコルクトの言葉にまったく心を動かさない。それどころか、セリムは、皇帝の地位を確かなものとするために部下にコルクトを絞殺させた後で、次のように述べる。

What, is he dead? Then Selimus is safe
And hath no more corrivals in the crown.

For as for Acomat he soon shall see
His Persian aid cannot save him from me.
Now Sinam, march to fair Amasia walls,
Where Acomat's stout queen immures herself,
And girt the city with a warlike siege.
(Scene 22. 85-91)

セリムの関心は敵との戦いにある。彼の言葉からは、悔い改めやキリスト教への改宗は期待できない。彼は、容易に改宗することのない、あるいはキリスト教をまったく理解しようとしないうトルコの皇帝として示される。それは、ときのイングランド人プロテスタント神学者たちが求めるトルコ人の改宗に対する期待に沿うものではなかったであろう。本劇を見ている観客にとって、トルコ人はイングランド人とその宗教を脅かす危険な存在と映ったのではなかろうか。

IV

続いて、アコマットがペルシャの皇帝イスマーイールとエジプトのスルタンに援軍を求め、タタール人に支援されているセリムとの対決に備える場面が示される。本劇が執筆された時期、トルコとペルシャ両国が戦いに必要な同盟国を求め、依然として緊迫した政情にあったことは繰り返すまでもない。ここでは、セリムたちの戦略がエリザベス政府の親トルコ外交政策の政治的な意義を考えさせる布石となっていることを再度確認してみたい。すなわち、本劇を執筆当時の東地中海を取り巻く国際情勢に位置づけるとき、マキアヴェリに政治思想を仰いで皇帝の地位を求め、トルコ周辺地域の支配者と手を組みながら、強固な支配体制を構築しようとしたセリムやアコマットの戦略は、東地中海の周辺地域における新たな世界秩序の出現を予感させる。事実、1600年代初頭になると、ペルシャ皇帝アッパース一世も、トルコに対抗するために神聖ローマ帝国、ポルトガルやスペインからの軍事的な同盟の申し出に積極的に応じ始めた(Blow 85-98)。

しかし、最終的に観客が見たものは、地位を獲得し、それを維持するには、父や兄弟殺しを厭わない野蛮で残虐なトルコ人の歴史の再現であったであろう。結末において劇作家が次のように予告したように、セリムは、アコマットを支援するペルシャ人やエジプト人の抵抗を鎮圧した後、帝国を部下に分け与え、軍力をもとにさらなる残虐な行爲を行うことになる。

Next shall you see him with triumphant sword
Dividing kingdoms into equal shares
And give them to his warlike followers.
If this first part, gentles, do like you well,
The second part shall greater murders tell.
(Conclusion. 3-7)

この言葉が示すように、セリムの支配は、対外戦争による帝国拡大によって特徴づけられる。引用の最終行で触れている第二部は執筆されなかったものの、セリムたちに抵抗を企てる者は、彼らの強大な軍勢力によって鎮圧される。そのとどまることを知らないトルコの軍勢力について、ヴィトカスは、ヨーロッパ諸国を震撼させるものであったであろうと述べている(7)。

まるで、このヴィトカスの言葉を打ち消すためであったかのように、本劇が執筆された時期、神聖ローマ帝国やネーデルラントは、サファヴィー朝ペルシャとの関係を重視し始めた。イングランドのエセックス伯爵もその例外ではない。以上のことから、劇作家は、東地中海周辺諸国の新たな国際情勢を前にして、トルコの過去を現代に置き換えて、マキアヴェリ的なトルコ人を表象しながら、トルコを信頼に値するパートナーとして認識するエリザベス政府の親トルコ外交政策の曖昧さや矛盾を観客に示したと考えられる。奸計をめぐるリアルな征服者としてのトルコ人のイメージは、本劇が上演された翌年の1592年に舞台化されたトマス・キッド作『ソリマンとパーシダの悲劇』(*The Tragedie of Soliman and Perseda*)において再燃する。この劇では、立法帝として知られていたトルコのスルタン、スレイマン一世が法を超越した暴君として登場する。すなわち、スレイマンは、恋敵のエラストゥスをロードス島の総督に任命し、パーシダとの結婚を認めておきながら、証人を偽証させて無実の彼を反逆者として仕立て上げて、イエニチェリに殺害させる。そして、エラストゥスを葬った後、スレイマンは、ロードス島を征服し、イスラム教に改宗しない同島のキリスト教徒を殺害する。この劇のもつ時局的な意味については、稿を改めて論じることとする。

Works Cited

- Bacon, Francis. *Collected Works of Francis Bacon*. Eds. James Spedding, Robert Leslie Ellis and Douglas Denon Heath. Vol. VII. Routledge, 1879, rpt. 1996.
- Black, J. B. *The Reign of Elizabeth 1558-1603*. 3rd Edition. Clarendon, 1987.
- Blow, David. *Shah Abbas: The Ruthless King Who Became an Iranian Legend*. Palgrave Macmillan, 2009, rpt. 2014.
- Chew, Samuel C. *The Crescent and the Rose: Islam and England during the Renaissance*. Oxford UP, 1937.
- Dale, Stephen F. *The Muslim Empires of the Ottomans, Safavids, and Mughals*. Cmanbridge UP, 2010.
- Degenhardt, Jane Hwang. "Catholic Prophylactics and Islam's Sexual Threat: Preventing and Undoing Sexual Defilement in *The Renegado*." *The Journal for Early Modern Cultural Studies*, 9:1(2009): 62-92.
- Dimmock, Matthew. *New Turkes: Dramatizing Islam and the Ottomans in Early Modern England*. Routledge, 2016.
- Foxe, John. *The Acts and Monuments of the Church Containing the History and Sufferings of the Martyrs*. Ed. M. Hobart Seymour. Part 1. Charterhouse Square, 1838.
- Grogan, Jane. *The Persian Empire in English Renaissance Writing, 1549-1622*. Palgrave Macmillan, 2014.
- Hakluyt, Richard. *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques and Discoveries of the English Nation*. Volume 6. Cambridge UP, 1904, rpt. 2014.
- Hale, J.R. *War and Society in Renaissance Europe 1450-1620*. Fontana, 1985.
- Machiavelli, Niccolò. *The Prince*. Trans. W. K. Marriott with an Introduction by Dominic Baker-Smith. Everyman's Library, 1908, rpt. 1992.
- MacLean, Gerald and Nabil Matar. *Britain and the Islamic World, 1558-1713*. Oxford UP, 2011.
- Matar, Nabil. *Turks, Moors, and Englishmen in the Age of Discovery*. Columbia UP, 1999.
- McJannet, Linda. *The Sultan Speaks: Dialogue in English Plays and Histories about Ottoman Turks*. Palgrave Macmillan, 2006.
- Thomas, Vivien and William Tydeman, eds. *Christopher Marlowe: The plays and their sources*. Routledge, 1994.
- Vitkus, Daniel. *Three Turk Plays from Early Modern England*. Columbia UP, 2000.
- Wiggins, Martin. *British Drama 1533-1642: A Catalogue*. Vol. III. Oxford UP, 2013.
- Willson, Richard. "'When Golden Times Convert': *Twelfth Night* and Shakespeare's Eastern Promise." *Shakespeare*, 6: 2 (2010): 209-226.
- Winter, Michael. "The Conquest of Syria and Egypt by Sultan Selim I, According to Erliyâ Çelebi." In *The Mamluk-Ottoman Transition: Continuity and Change in Egypt and Bilād al-Shām in the Sixteenth Century*. Eds. Stephan Conermann and Gül Şen. Bonn UP, 2017, pp. 127-43.

*本稿は、第57回シェイクスピア学会(平成30年10月13日、津田塾大学小平キャンパス)において口頭で発表した原稿に加筆・修正を施したものである。会場で貴重なコメントいただいた方々に心から感謝申し上げる。なお、本稿は、令和元年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究(c))(課題番号:17K02532)の成果の一部である。